令和４年度　学校評価自己評価表　　狛江市立狛江第四中学校

学校教育目標

１　自立　「すすんで学び、考える力をつけよう」（**主体的態度・思考力、問題発見・解決能力**）
２　連帯　「力を合わせて、みんなのためにつくそう」（**人間関係形成能力**）
３　健全　「規律を重んじ、心身をきたえよう」（**自己実現力、実践力**）

目指す生徒像

「自分を信じ、仲間を信じ、互いを認め合いながら成長する生徒」

○自ら学び考え、主体的に物事に取り組む生徒
○互いの存在を認め合い、互いに協働し高め合う生徒
○自らを律し、心身共に健康で、夢や目標の実現に向けて前向きに実践する生徒

目指す学校像

「生徒一人ひとりが目を輝かせ、何事に対しても前向きに活動できる学校」

○落ち着いた学習環境の下、生徒たちが**意欲と関心をもって「自主的・自発的」に取り組むことのできる授業**が展開され、確かな学力が確実に身に付く学校
○**生徒たちが主体となり、生き生きと活動できる学校行事・生徒会活動・部活動**を通して、**豊かな心と健やかな体を育む**学校
○**３年間の進路学習が計画的に展開され**、生徒一人ひとりの進路希望を実現する学校

△：＋３ポイント、▼：－３ポイント　　**太ゴシック：新規、下線：指導の重点**

領域	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	取組指標 評価	取組指標 対象	成果指標 評価	成果指標 対象	分析・コメント(R3)	改　善　策　※学校評価委員より
確かな学力の向上	基礎・基本の確実な習得と、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成、学びに向かう力、人間性等の涵養をバランスよく実現する。	適切に教育課程の管理を行う。	年間指導計画に基づき授業時数の管理を適切に行う。	4	教員	*	*	教員 100%(100%) 授業実施率：１年＝%(107.7%)、２年＝%(106.7%)、３年＝%(103.5%) ⇒各担当者の適切な進行管理等により授業内容については予定の内容をすべて終了することができた	<u>時間割についてはクラス毎のばらつきを是正して時数を確保するためにこれまで通り変動型の時間割編成とするが、教務主任・時間割担当・月別行事予定担当での三者打合せを定期的に実施し必要事項の伝達を適時・適切に行っていく</u>。 ※コロナ禍で大変な苦労があったことと察する。 ※「教育課程を適正に遂行」「各クラスのバランスのよい指導」などの文言が気になります。文科省・教育委員会からの要請・指示・指導などを考えれば仕方ないことであるのは十分理解していますが、ダイバーシティの重要性が叫ばれている昨今、教育現場においてもっと子どもたちの多様性（得手不得手、好き嫌い等）を大切にする変化があってもよいと思う。
			週案簿に基づき先を見通した計画を立て、バランスの良い指導を行う。	4	教員	*	*	教員 100%(100%) ⇒週案簿の活用は定着している。	<u>引き続き</u>毎週金曜日の提出の際に確認し、<u>週案簿の有効活用</u>を促進していく。
			指導と評価の一体化を図る評価計画を作成し、３観点についての適切な評価規準に基づいた評価・評定を行う。	3	教員	*	*	教員　95%(100%)　▼ ⇒個別の問題なのか、全体の課題なのか、100%ではなかった原因を探りたい。いずれにしても学習評価については引き続き研究していきたい。	適切な評価材料を収集し、より公平・公正な評価・評定を実践する。特に、<u>第3観点の「主体的に学習に取り組む態度」の見取り方や適切な評価材料の設定の仕方等についてさらに研究を進めるとともに、「指導と評価の一体化」に向けた授業改善を進める</u>。
		「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る。	教材研究や指導方法等の工夫により、生徒が「分かりやすい」と実感できる授業実践を行う。	4	教員	4・3	生徒・保護者	生徒　96%(93%)　△ 保護者　88%(90%) 教員　100%(100%) ⇒今年度の校内研究のテーマである「主体的に学習に取り組む生徒の育成」を目指して授業改善が確実に実践されている成果としてとらえたい。<u>保護者にとっては何をもって「分かりやすい授業」とするか、答えにくい設問の一つであると推測される</u>。	<u>引き続き</u>「主体的に学習に取り組む生徒の育成」を目指した授業改善を進め、<u>「主体的・対話的で深い学び」の実現</u>を図る。また、<u>保護者に対しては、授業公開等により子どもたちの学習の様子を見ていただく機会を増やしていく</u>。 ※保護者の声を聴くことでさらに良くなる改善点が見つかるのではないか。 ※保護者は前年度比マイナスとなっているが、定期考査の結果から捉えているのでしょうか？
			定期テストや各種学力調査、生徒による授業アンケート等の結果を参考にした授業改善プランを作成し、授業改善に取り組んでいる。	4	教員	3	生徒	生徒　80%(79%) 教員　95%(93%) ⇒取組指標に対して成果指標が低いことから<u>授業アンケートの内容及び活用方法について検討したい</u>。	<u>引き続き</u>各種調査やテスト、授業アンケートの結果を踏まえた<u>授業改善プランを作成する</u>とともに、<u>授業アンケートの結果等を活かした三者面談を実施する</u>などして、生徒への還元を検討していく。 ※目標値に達しているので個人の意識でさらに向上できる。
			授業のねらいと展開を明示し、生徒に課題意識をもたせ、見通しをもって粘り強く学習に向かうことができる授業を行う。 ***「主体的な学び」***	4	教員	4	生徒	生徒　92%(90%) 保護者82%(86%)　▼ 教員　95%(100%)　▼ ⇒<u>「主体的な学び」に関する不十分な点の改善を期待したい</u>。	すべての教科において、「育成したい力」を明確にした授業のねらいと展開を提示することで、生徒に課題意識をもたせ、自分の考えをもち、見通しをもって粘り強く学習に取り組む意欲を高めさせる（主体的な学び）とともに、授業内容や単元に応じて、発表や討論等の他者と交流する学習活動を通して自分の考えを広げ深める（対話的な学び）ことができる生徒を育成する。そして、<u>授業の終末においては、まとめ・振り返りの時間を確保し、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて学んだ知識を整理し、より深く理解して自分自身の次の課題を見つけさせる（深い学び）授業を展開し</u>、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る。 （令和6年2月15日　教育研究奨励校研究発表）
			生徒同士の協働や教職員・地域の人との対話等の他者と交流する学習を通して自分の考えを広げ深めさせる授業を行う。***「対話的な学び」***	4	教員	4	生徒	生徒　91%(87%)　△ 保護者86%(92%)　▼ 教員　100%(87%)　△ ⇒教科の特性をふまえたグループワークの取組が進められている成果としてとらえたい。	※保護者や教職員からは生徒が自分の考えをもち、課題を解決しようとしていないように見えない・感じないということがあるというのでしょうか？ ※生徒が興味をもって取り組める課題作りが必要か？ ※教職員の評価アップはとても心強い。 ※保護者が下がっているのは、その場面を見る機会が少ないからなのでしょうか？ ※考える力が少し足りないように思う。 ※グループワークは学校ならでは学習法で、独学や塾では学べないことがたくさんあるので今後も力を入れてほしい。
			授業の終末に、まとめ・振り返りの時間を確保し、各教科等の「見方・考え方」を働かせて、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を見出して解決策を考えたりすること等に向かう授業を行う。***「深い学び」***	4	教員	3	生徒	生徒　89%(89%) 保護者73%(78%)　▼ 教員　95%(87%)　△ ⇒３つの学びの内でもっとも難しい学びであり、各教科で様々な取組を試行錯誤している様子がうかがえる。<u>「深い学び」について共通理解を深める必要がある</u>。	
		少人数制授業により個に応じた指導を充実させる。	数学・英語では「東京方式習熟度別指導ガイドライン」に沿い、個に応じた指導の充実を図り、学力の向上を推進する。	*	教員	3・3	生徒・保護者	生徒　89%(91%) 保護者84%(85%) ⇒一定の成果は現れているが、<u>「個別最適な学び」をいかに実現していくかが難しい課題である</u>。	<u>引き続き</u>「東京方式習熟度別指導ガイドライン」に沿って、より一層の個に応じた指導の充実を図る。数学ではつまずきやすい内容の習得を目指した繰り返し学習を行い基礎・基本の確実な定着を図るとともに、発展クラスでは狛江市の発展教材等を活用し学習意欲を高める。英語科では計画的に都英語教材「Welcome to Tokyo」に取り組むとともに、<u>令和4年度に実施された「中学校英語スピーキングテスト」の結果を踏まえて</u>、オンラインスピーキングトレーニングの計画的な実施や、「TOKYO GLOBAL GATEWAY」を訪問すること等の体験的な学習の場を利用するなどして、<u>より一層の「聞く」「話す」指導を重点的に行う</u>。 ※少人数授業は個人のレベルが分かり、より理解しやすいように授業が行われていると思う。
		ICT機器を活用した教育活動を充実させる。	観察・実験、見学・調査・実習等、体験的な学習や問題解決的な学習の場面並びにリモート授業等で効果的にICT機器等を活用する。	3	教員	3・3	生徒・保護者	生徒　83%(89%)　▼ 保護者 85%(78%)　△ 教員　85%(73%)　△ ⇒<u>タブレットPCを含めたICT機器をどのような場面で活用するか、より効果的な活用についてさらに研究する必要である</u>。	ICT機器及び<u>デジタル教材等</u>については分かりやすい授業を実践するためのツールとしての利用だけでなく、個人・グループ学習においても、観察・実験、見学・調査・実習等、体験的な学習や問題解決的な学習の場面で積極的に活用する。 ※生徒が利用して良かったと思えるようなタブレット等の学習方法の工夫が必要。 ※今はPCの得意な生徒も多いので、どの教科の先生も一定レベルの知識が必要。 ※生徒が下がっている原因は？機器を使うのが苦手な生徒が増えた？機器を使わない伝達方法を好むのか？
		家庭学習の習慣化を図る。	毎日１時間以上の家庭学習の習慣化に向けた取り組みを、授業や学年・学級の指導の中に位置づけて実践する。	1	教員	1	生徒	生徒　59%(65%)　▼ 保護者　69%(61%)　△ 教員　65%(73%)　▼ ⇒<u>改めて家庭学習の内容や方法等について研究し、その定着に向けて検討していく必要がある</u>。	学習の記録やシラバス、各種調査結果等を活用し、常に学習目標を意識して学ぶように指導するとともに、教育相談等を通して家庭への啓発をより一層、粘り強く行うことで家庭学習の定着を図る。その際、<u>予習復習を含む自主的な学習に取り組めるよう</u>、授業や学年、学級の指導の中に位置付けて習慣化を図る。また、<u>タブレット端末を活用した家庭学習への支援において、生徒一人ひとりに応じた学習活動や学習課題を提供することで個に応じた指導を充実させ、個別最適な学びの実現を目指す</u>。 ※生徒自身が自学習の習慣が身についていないと実感している。中学生らしさを発揮して意欲向上を期待する。 ※タブレットの活用等、新しい方法を考える時なのか？そもそも家庭学習とは何か？何のためにするのか？別のやり方はないか？検証する必要がある。 ※家庭学習の習慣が身についていない生徒が多いのは、塾や習い事で忙しいからなのか？部活動等で疲れてしまうからなのか？家では勉強する気になれないのか？家庭で学習することができない事情があるのか？要因が知りたい。

豊かな人間性の育成		基本的生活習慣の定着を図る。	時間を守ることや身だしなみを整えること等、基本的な生活習慣の指導を行う。	4	教員	4	生徒	生徒　90%(93%)　▼ 保護者　86%(89%)　▼ 教員　100%(100%) ⇒概ね基本的な生活習慣は身についている。教員側の課題として朝8時30分の出欠確認の徹底を図りたい。	全教育活動を通して、基本的生活習慣の定着を図るとともに、自立・連帯・健全の精神を養うための指導を意図的・計画的・継続的に行うとともに、日々の指導において、教員側の声かけを全員で行い、必要に応じて保護者に伝えて共に子どもの成長を見守っていく姿勢を示していく。特に、8時30分の時点で教員が確実に教室にいられるようにする。そのために、グループウエアの掲示板を有効に活用するなどして、職員朝会の短縮化を図る。 ※この先、社会人になることをふまえ、とても大切なことなので高い意識をもって行動してほしい。
			教育活動全体を通して「挨拶」の定着を図る。	4	教員	4	生徒	生徒　94%(94%) 保護者　92%(88%)　△ 教員　95%(100%)　▼ ⇒生徒会を中心とした挨拶運動は緑野小においても実施できたが日常的な挨拶についてはまだ改善の余地がある。	挨拶は「「相手の存在を認めているということ」であるという基本に帰り、日常的な挨拶を通したコミュニケーションを大切にしながら、きめ細かい心の触れ合いを通して豊かな人間関係の構築を図る。 ※基本的なことなので目標値はもっと高くてもよいと思う。
豊かな人間性の育成	充実した特別活動を通して達成感や成就感を体感させ、自主性・協調性・責任感を育むとともに、思いやりの心や連帯感・自己有用感をもたせる。	行事や生徒会・委員会活動、部活動を通し、協調性を高め、充実感を体感させる。	生徒の積極的且つ意欲的な行事への取り組みを推進する。	4	教員	4	生徒	「体育祭・合唱祭　」「体験学習」 生徒　94%(95%)　94%(−) 保護者　95%(94%)　98%(−) 教員　100%(100%)　−(−) ⇒コロナ禍の制限が徐々に緩和される中で必要な感染症対策を講じながら実施方法等を工夫し実施することができた。改めて宿泊学習の意義を実感するに至ったように思う。	新型コロナウイルスの基本的な感染症対策を確実に講じた上で、アフターコロナを見据えた特別活動について、実施方法の工夫・改善を図っていく。令和7年度の修学旅行の行き先については令和5年度の実施結果を踏まえて検討する。 ※四中らしく非常に喜ばしい評価だと思います。 ※多くの生徒が意欲的に取り組んでいるのは素晴らしいことだと思うが、意欲的に取り組めていない少数の生徒が体育祭や合唱祭等を嫌がっていなければとも思ってしまします。
			学年縦割りグループによる活動を重視し、学年を超えた幅広いコミュニケーション能力や上級生としてのリーダーシップや責任感の育成を図る。	4	教員	3	生徒	生徒　83%(86%)　▼ 保護者　87%(83%)　△ 教員　95%(100%)　▼ ⇒一定の成果は見られるものの「まったく思わない」と答えた生徒が全校で14名いるという事実を謙虚に受け止める必要がある。	学校行事をはじめとした諸活動において、常に目的と目標を明確にした上で、学年学級縦割りグループによる活動を重視し、異年齢での望ましい活動を通して、学年を超えた幅広いコミュニケーション能力や上級生としてのリーダーシップや責任感を培う。 ※上級生と見て憧れ学び、やがて上級生の自覚をもって下級生の手本となる、これは四中の良き伝統である。 ※前年度より下降している。「豊かな人間性」のコアになる要素なので課題を整理して対策を考える必要がありそうです。
			生徒会や専門委員会、行事の委員、クラスの係活動等における積極的・自主的な取組を推進する。	4	教員	4	生徒	生徒　92%(92%) 保護者　86%(85%) 教員　100%(100%) ⇒100%の取組（努力）に対する92%の成果は本当に素晴らしいが、生徒会の活動内容等については持続可能かどうかという視点を踏まえて見直していく必要がある。	引き続き生徒会活動や学級活動等の活性化を図り、集団としての意見をまとめる話し合い活動等を通して、集団の一員としての自覚を育てて望ましい人間関係を構築させるとともに、主体的によりよい学校生活を築いていこうとする態度を育成し、「共に学ぶ集団」としての支持的風土の形成を図る。 ※一人ひとりの意識の高さを感じます。 ※生徒の中には積極的な関わりに苦手意識をもっている子どももいるかもしれないと感じた。
			部活動を通して忍耐力や協調性、責任感を育てると共に、生徒同士の連帯感を深める活動を推進する。	3	教員	3	生徒	生徒　88%(90%) 保護者　87%(89%) 教員　85%(86%) ⇒一定の評価は得ているが、「活動時間が短い」「文化部を増やしてほしい」等の要望もある。	現状の部活動を充実させることに重点を置きながら、部活動を通して忍耐力や協調性、責任感を育て、健康で文化的な生活が送れるようにするとともに、異学年交流を図り生徒同士の連帯感を深める集団活動を通して生徒の自主性や社会性を身に付けさせ、豊かな人間性を育成する。部活動に地域移行については、検討委員会の動向に注視していく。 ※生徒・保護者ともに下がっているので注意が必要と考えます。 ※部活動の時間が短くなっていることが、このような評価なのかと思う。
		生徒一人ひとりを大切にするとともに、思いやりのある生徒を育成する。	日常の声かけや三者面談等を通して、一人ひとりの生徒理解に努める。	4	教員	4	生徒	生徒　91%(93%) 保護者　93%(93%) 教員　100%(100%) ⇒WEBQU結果の活用も進んできており、100%の取組（努力）に対する92%の成果は本当に素晴らしい。三者面談の内容については検討していきたい。	夏季休業中及び冬季休業前に教育相談（三者面談）を実施し、その中で生徒一人ひとりの学習の課題やWEBQUの結果を家庭とも共有することで、継続的な学習と学力の定着を推進するとともに精神面や生活面での安定を図る。特に、2学期の三者面談については、通知表の所見に換わる教科ガイダンス的な内容を充実させる。 ※生徒にとっては先生は大切な相談相手だという想いをとともに、こんなこと相談したら嫌われないか、叱られないかという不安な気持ちもあるので、大変なことは承知しているが、常に生徒の変化に気を付けてほしいと願っている。
			いじめ・不登校について、早期発見・早期対応に努めるとともに、家庭・地域及び関係機関等と緊密に連携して組織的に対応することで、生徒が安心して学校生活を過ごせるように努める。	4	教員	3	生徒	生徒　89%(91%)　▼ 保護者　94%(91%)　△ 教員　90%(100%)　▼ ⇒昨年度から生徒への質問を「いかなる理由があってもいじめは絶対にいけないという気持ちをもっている」から「先生方がいじめや不登校に対して適切に対応してくれているので安心して学校生活を過ごすことができている」に変えたことでいじめ・不登校への取組に対する成果を見ている。認知件数は２件であったが、「見逃しているいじめはないか」と常に危機感をもって生徒指導にあたっていきたい。特に、教員の取組が100Pから90Pに下がった原因は、個々の指導の問題なのか、組織としての取組の問題なのか、具体的な意見がほしい。	いじめや不登校問題の未然防止や早期発見、早期対応のために、 ①アンケート調査やWEBQU等を通して生徒理解を深める。 ②スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家を含んだ組織的な教育相談体制の充実を図る。 ③あらゆる機会を活用して、いじめを「しない・させない・見逃さない・見て見ぬふりをしない」態度の育成を図る。特に、生徒がいじめについて深く考え、いじめは絶対に許されないことを再認識できるようにするため、「考えよう！いじめ・SNS＠TOKYO」等を活用して、学期の始めにいじめに関する授業を実施する。 ④四中いじめ防止基本方針に基づいた教職員の組織的な取組を進める。 ⑤教室に入れない生徒に対しては、本人の希望に応じて授業の様子を別室でモニターできるようにする。 ⑥自殺防止に係わる知識について共通理解を図り組織的に対応するとともに、東京都教育委員会作成のDVD等を活用した「様々な困難・ストレスの対処方法」「生命尊重」「援助希求行動（SOSの出し方）」等の学習を保健体育科や道徳等において、少なくとも1単位時間実施する。 ※教員の前年度が100というのはおかしいと思うが、−10Pは気になる数値です。 ※不登校はどの学校、どの学年、どのクラスも抱える大きな社会問題なので、なぜ不登校になってしまうのかの原因、きっかけを注視して個別サポートをより強化してほしい。 ※いじめは生徒たちが当事者なので先生方が意識を高くもって「気づくこと」が大切だと思う。 ※いじめを完全に無くすことは非常に難しいことだとは思うが、相手の立場や気持ちを考えられるような人に育てる指導が必要であり、相手を思いやる心を育んでほしい。
			校内委員会を中心に、個別指導計画に基づいた特別支援教育を推進する。	4	教員	*	*	教員　90%(100%)　▼ ⇒教員の取組が100Pから90Pに下がった原因が校内委員会のどこにあるのか、運営方法に問題があるのか、それとも特別支援教育の推進そのものに課題があるのか等の具体的な意見がほしい。	特別支援校内委員会を隔週開催し、学校生活支援シート等を活用しながら、特別な支援の要する生徒（不登校生徒を含む）の実態把握と指導について協議していく。福祉や医療等の関係機関との連絡調整については、特別支援教育コーディネーターが中心となって行い、保護者に対する学校の窓口として機能させる。また、東京都及び狛江市の巡回相談を活用し、障がいの有無に関わらず支援が必要な生徒に対する指導等についての研鑽を深め、日々の指導に生かす。 ※教員の前年度が100というのはおかしいと思うが、10P落ちているのが気になる。 ※教職員の今後の努力に期待したい。
			WEBQUアンケート結果を活用し、生徒の実態把握に努めるとともに、教育相談等を通して保護者との連携を図る。	4	教員	*	*	教員　90%(100%)　▼ ⇒年２回の学年における検討会での結果が専門家によるコンサルティングで有効に活用することで共通理解は進んでいると思われるが、「あまり思わない」と答えた方が２名いた。	引き続きWEBQUの結果等を活用し、スクールカウンセラーとの連携を図りながら、発達障がい等のある生徒もない生徒も生き生きと学ぶことができるユニバーサルデザインの考えに基づく指導と学級づくりを行う。また、家庭と子どもの支援員や学生ボランティア等を有効活用し、授業中や放課後の学習支援を進める。 ※教職員の今後の努力に期待したい。
			保健体育及び体育祭等を通して、体力や忍耐力を向上させ、生涯を通じて健康・安全で活力のある生活を送るための基礎を培う。	4	教員	4	生徒	生徒　90%(89%) 保護者　89%(85%)　△ 教員　95%(100%)　▼ ⇒保健体育では男女共修を基本として個に応じたきめ細かな指導が計画的に行われており成果が上がっているが、教員のマイナス評価の理由が不明である	引き続き、保健体育科においては、男女共習を基本として、コミュニケーションや協力・協働を重視しながら個に応じたきめ細かな指導を目指すとともに、体つくり運動、持久力の向上、体育理論、保健学習を充実させ、意図的・計画的に体力向上を図る。特に、運動する生徒とそうでない生徒の二極化の実態をふまえて意図的・計画的に「体つくり運動」の学習を展開し、体を動かす楽しさや心地よさを味わわせることで、主体的に運動に取り組む態度を養う。また、ロードレースの代替として持久力の向上のための活動について検討していく。 ※個人差があるので達成感については意識の差が大きいと思う。
			保健指導及び食育の観点を踏まえた給食指導を充実させるとともに、食物アレルギーについての理解を深め事故の絶無に努める。	4	教員	*	*	教員　100%(100%) ⇒感染症対策を講じながらの給食指導はとても大変だが、担当者の努力で学校全体の食育に対する意識は高く、また食物アレルギー対応については校内での研究を実施して組織的な取組が実施されている。	引き続き、保健指導及び食育の観点を踏まえた給食指導を充実させるとともに、食物アレルギーについての理解を深め、適時・適切な対応により事故の絶無を図る。 ※アレルギーについて自分で判断できる年齢なので家庭での協力で回避できると思う。

		健康教育として、生命・健康・安全・体力の重要さを体感させる。	防災・危機管理マニュアルや補助教材等を活用し実践的な避難訓練を実施する。	4	教員	4	生徒	生徒　96%(91%)　△ 保護者　89%(92%)　▼ 教員　95%(100%)　▼ ⇒地域防災訓練では初めてＶＲ車を利用した体験訓練の機会を得ることができた。	引き続き「防災・危機管理マニュアル」及び防災教育補助教材（「安全教育プログラム」「防災ノート」）等を活用した実践的な避難訓練や家庭や地域、関係諸機関と連携した防災訓練等を実施し、家庭・地域・関係諸機関と一体となり生徒の安全確保と健全育成に取り組む。 ※生徒の評価が高いことに安心感を得る。いざという時に行動できる、協力してもらえる大きな力となる。 ※防災意識が高まるよう、地域も協力していきます。
			家庭や地域、関係諸機関と連携して、セーフティ教室や情報モラル教育を推進する。	4	教員	4	生徒	生徒　93%(90%)　△ 保護者　89%(93%)　▼ 教員　90%(93%)　▼ ⇒日々の指導が重要であることは言うまでもないが意図的なセーフティ教室を実施することにより情報モラルを高める効果が期待できる。	引き続きSNSに関する取組については、生徒の実態や「SNS東京ルール」を踏まえて、「SNS四中ルール」を適時・適切に更新し、事前事後の学習を充実させたセーフティ教室を実施し、教職員・保護者・生徒・地域の連携の元、情報モラル教育の充実を図る。特に、ネットゲーム依存症や児童ポルノ防止法についての理解を深め、被害者だけでなく、加害者の立場にならないように指導を徹底する。また、タブレット端末の効果的な利用を通して、生徒たちに自分事として管理していくための約束事や使い方を考えさせながら、「善き社会の担い手」となるための知識・能力を育む。 ※モラルをもって行動できる人格形成をしてほしい。正しい判断ができる人間に！ ※保護者と教職員が生徒のモラル意識を高められたと思えるよう、従来の方法以外に何か手だてを考えた方がいいのかもしれません。
			学年に応じた課題を設定し、調べ発表し合う学習を通して、東京オリンピック・パラリンピックに対する興味関心を高め、オリパラの精神・スポーツ・文化・環境の４つのテーマについて横断的な学習を推進する。	3	教員	4・4	生徒・保護者	生徒　85%(93%)　▼ 保護者　92%(81%)　△ 教員　85%(100%)　▼ ⇒楽しめるイベントとして成果は上げられたが、オリパラが終了した今、横断的な学習については再考すべきである。	平成28年度から令和3年度まで実施してきた「東京都オリンピック・パラリンピック教育」の取組については、共生社会の形成に向けて「未来の東京」の担い手となる人材を育成することを目指し、令和4年度から「学校2020レガシー」として、継続・発展させていくこととなった。本校では、様々な活動を通して生徒間の信頼関係を築くことで、社会性や豊かな心、ボランティアマインド（四中2020レガシー）を育てていくことを目指す。このことをふまえて、具体的な方策及び学校評価項目を変更していく。 ※興味による内容が強いと感じる。多様性は必要だが「オリンピック」に限定しなくてもよいのでは？
		道徳・人権教育を年間指導計画に基づき推進する。	「道徳の教科化」に関する指導内容や方法、評価等の研究を引き続き進め、「考え、議論する」道徳科を実践する。	3	教員	4	生徒	生徒　90%(93%)　▼ 保護者　90%(88%) 教員　85%(87%) ⇒授業時数の確保はもとより内容や指導方法の工夫等により教科としての道徳が定着しつつあり、年度末の評価についても課題があるという声は上がっていない。	引き続き道徳的な課題を生徒一人ひとりが自分自身の問題として捉えて、自己の生き方として考えを深めていくために、「考える道徳」「議論する道徳」の授業改善・充実に努める。また、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を整備するとともに、「道徳の単元化」「道徳のユニット化」を含めた実践的な全体計画及び年間計画を作成し、全教師の共通理解を図り、重点課題の解決に向けた効果的なカリキュラムを編成する。なお、道徳授業地区公開講座については、保護者・地域への公開を前提に計画していく。 ※道徳心、現代において近頃、嫌なニュースが多い中、生徒たちにも悪い手本を耳にさせていて混乱させているので、自分をしっかりともってほしい。 ※前年比較で下降しているのが気になる。この項目は「豊かな人間性の育成」の中でもコアになる要素なので、課題を整理して対策を考える必要がある。今後の先生方の努力に期待します。
		キャリア教育に基づく進路指導を実践する。	小中連携の視点をふまえながら、中学校３年間を見通した指導計画に基づき、キャリアパスポートを活用した継続的・計画的な指導を展開する。	4	教員	4	生徒	生徒　90%(88%) 保護者　86%(83%)　△ 「進路学習」「キャリアパスポート」 教員　95%(94%)　70%(87%)　▼ ⇒子どもが自分の将来や進路、社会を見つめるきっかけとなることを期待した取組であり、基本的には小中高と一貫して続けることを改めて確認する必要がある。	小学校との連携を図りながら、各学年の特性を踏まえ、年間指導計画・全体計画に基づく一貫した指導の下に、外部人材を効果的に活用し、適切な進路が選択できる力を育成する。その際、生徒が活動を記録し蓄積する「キャリア・パスポート」の活用を図る。 ※長期的視点で広い視野をもった指導をお願いしたい。 ※キャリアパスポートを活用した継続的な指導をお願いしたい。
			職場体験や上級学校訪問等を通して、キャリア教育の視点に立った職業観・勤労観を育み、生徒一人ひとりの進路希望に実現を図る。	4	教員	3	生徒	生徒　86%(91%)　▼ 保護者　90%(90%) 教員　90%(94%)　▼ ⇒職場体験の代替として職業講話を実施し直接仕事に関する話を聞く機会を持てたことはとても良かったが、生徒のニーズに十分に答えることが出来なかった。	キャリア教育の視点に立った職業観や勤労観の育成を図るために、地域の人材を活用した職場訪問・職場体験等を通して、様々な社会で生きる人とのふれあいや職場での体験により、自己理解や将来の生き方について考えさせ、学んだ考えや意見をまとめ・発表させることで協働的な学びを推進する。また、「四中ゾーン・コミュニティスクール」を活用し、これまで以上に保護者・地域との意図的・計画的・継続的な連携を進めていくことで、「小中9年間をつなげるキャリア教育」の実現を目指す。 ※コロナで職場体験ができないのが生徒に影響を及ぼしている。 ※職業講話とかで生徒の評価を上げる努力をしてほしい。 ※今年度「職業学習」に参加させていただきました。私のような者でも多少お役に立てるなら喜んで参加させていただきます。
保護者・地域との連携	地域に開かれた学校づくりに努め、地域の施設、人材を活用した教育活動に努める。	学校からの情報発信に努める。	学校だよりや学年だより、ホームページで学校情報を積極的に公開する。	4	教員	1・2	生徒・保護者	生徒　61%(65%%)　▼ 保護者　78%(86%)　▼ 教員　100%(100%) ⇒保護者からは一定の評価を得ているが昨年度よりも数値が下がっていることを受け止め内容の充実を目指す。	子どもたちの教育は学校だけで完結するものではなく、教育に対する家庭や地域社会の深い理解を基盤とした連携・協力があってはじめて、充実した教育活動を実現できるということを踏まえ、より多くの保護者や地域住民に学校への関心を持ってもらうために、各種たよりや学校HP等を通して、より一層の情報発信に努める。 ※対策が必要と考えます。 ※学年だよりはクラスの様子がよく伝わり安心だし、楽しく拝見している。 ※学校側の努力が伝わらず残念。ペーパーレスにするともっとダウンしてしまうような気がする。 ※もって帰らない生徒が多いのでは？
			学校公開・授業参観・保護者会の持ち方を工夫し参加率を高める。	3	教員	4	保護者	保護者　92%(93%) 教員　80%(90%)　▼ ⇒「子どもたちの頑張りを見る機会をもう少し増やしてほしい」という保護者からの意見が上がっている。	基本的な感染症対策を確実に実施した上で、学校行事や学校公開、保護者会、地域と協働した行事を通して、保護者や地域との連携を深めるとともに、狛江五小と本校が創る「四中ゾーン・コミュニティスクール」の推進を図ることで、地域の人的・物的資源を活用した教育活動へと発展させていく。 ※コロナ禍の落ち着きと共に、より開かれた学校を目指してほしい。 ※生徒の意外な面が見られるので、交流行事についてはぜひとも参加してほしい。
			保護者・地域に対して体育祭・文化発表会・合唱コンクールなどの学校行事への参観を促す。	4	教員	4	保護者	保護者　99%(95%)　△ 教員　95%(93%) ⇒合唱祭を麻生市民館を会場に開催し、学年ごとの保護者参観を実施することができた。	
			ＰＴＡ活動や地域行事等に積極的に参加する。	1	教員	1	保護者	保護者　66%(-) 教員　58%(-) ⇒思っていた以上の教員の取組に対する自己評価が低かった。ＰＴＡや地域の活動とＣＳとの兼ね合いについて検討していく。	
		地域を活用した学習を進める。	職場体験や「四中スペシャル」等の地域人材を活用する取組を推進する。	4	教員	3	生徒	生徒　84%(88%)　▼ 保護者　94%(89%)　△ 教員　95%(100%)　▼ ⇒「四中スペシャル」については事後アンケートの結果を踏まえて改善していく。	引き続き地域の諸活動への参加・実施を促し、地域の人々との交流を積極的に図り（「四中スペシャル」等）、人と人との触れ合いの大切さを学ばせ、併せて目上の人を敬う心を育む。また、1年次に「狛江探検」と称して狛江市に関する調査活動を実施し、郷土を愛する心の涵養を図るとともに、SDGsについて学び、今後の生き方について考察できるようにする。 ※四中スペシャルは、もっと生徒たちの意見を聞き、興味や関心をそそる内容を組めると良い。 ※四中スペシャルは四中の代表的なイベントの一つですね。
誇れる四中生の育成		生徒一人ひとりを活かす教育活動を行う。	生徒一人ひとりに自己有用感や成就感、連帯感等を実感させる教育活動を工夫する。	4	教員	4・4	生徒・保護者	生徒　91%(91%)，　94%(94%) 保護者　92%(93%)，　95%(94%) 教員　95(100%)　▼ ⇒「チーム四中」として進めてきた教育活動に対する成果としてとらえたい。何をもって「やりがい」と感じるのかは一人ひとり違うのかも知れないが、教職員全員が「毎日充実した仕事ができている」と実感できる職場作りを目指していきたい。	引き続き狛江四中の良き伝統と校風を継承しながら、時代の変化や地域社会の要請を真摯に受け止め、より充実した狛江四中の教育活動を創造していくことを目指す。特に、アフターコロナに向けて、教職員にとっての「やりがい」と「多忙感」、「負担感」等を共有しながら、基本的な感染症対策を確実に実施しながら、四中として大切にしてきた教育活動をよりよい形で実施していきたい。 ※先生方のモチベーションの低下は学校生活全体に大きな影響を与えますので頑張っていただきたい。 ※非常に高いレベルの評価で今後もそうあり続けてほしいと思います。 ※この項目が90Pの高ポイントであれば素晴らしい学校だと誇れる。ただし、このアンケート自体、不登校気味の生徒・保護者の回答率は低いかもしれないので、どの項目に対しても隠れた回答を加味して考えなければならない。 ※教職員が100Pであってほしい項目だと思う。先生の中には充実した仕事ができていなと感じている方がいるのか、生徒は学校生活を楽しんでいると感じ切れていないのか、そこのところはわかりませんが、先生方が充実した仕事ができるように、家庭や地域が協力していければと思います。